

竹チップ×牛ふんで堆肥 放置竹林活用、1年かけ開発 佐用の製造会社と神戸学院大生

2026/9/13 05:10

西播 経済



竹チップと牛ふんが入った堆肥を開発した近畿農産資材と神戸学院大学のメンバー＝佐用町山脇



佐用町山脇の牛ふん堆肥製造会社「近畿農産資材」と、神戸学院大現代社会学部の菊川裕幸准教授（37）のゼミが、放置竹林から取れた竹チップと、県内などから集めた牛ふんを原料にしたオリジナル堆肥を開発した。約2年前に構想し、1年かけて試験を繰り返して製品化にこぎ着けた。大手ホームセンターでの販売も決まり、近畿農産資材とゼミは「放置竹林の利活用システムを確立したい」と意気込む。（真鍋 愛）

同社は牛ふんや樹皮を発酵させた堆肥を主力商品とし、農業や園芸用に販売している。竹チップを使った堆肥の開発は、付加価値の高い新商品を目指す同社が、放置竹林の活用に取り組む同ゼミに協力を呼びかけて、2024年から始まった。

学生らは神戸市内の放置竹林で伐採した竹を砕いて竹チップにした。同社はこの竹チップと牛ふんを2対8の割合で配合し、約3カ月発酵させて堆肥にした。

製品化につなげるには、季節を問わず安定的に生産できることと、堆肥として既存の商品と遜色のない効果を発揮することが重要になる。そこで両者は約1年をかけ、堆肥の発酵試験と作物の栽培試験を重ねた。

発酵試験では、堆肥が発酵しやすい夏と、発酵しにくい冬の2シーズンに分けて発酵させ、いずれの時期でも成分が変動しないことを確認した。栽培試験では培養土に入れる堆肥の割合を変えて、パンジーやハボタンなどを育てた。その結果、竹チップ入りの堆肥を培養土に1割程度混ぜると

生育が良く、一般的な堆肥と同様の効果が得られることが分かった。

製品化にめどがたち、オリジナル堆肥を「CHIKURI（チクリ）」と名付けた。電子商取引（EC）サイト「花の土屋さんカネア」で20リットル入り（希望小売価格380円）を販売したのに続き、ホームセンターの「カインズ」で扱うことも決まった。カインズでは「竹チップ入り牛ふん堆肥」の商品名で40リットル入り（同500円）を販売する。

竹は乳酸菌を多く含むため、「チクリ」は土壌改良も期待できるという。近畿農産資材の西威誠（いせい）社長（51）は「原料の竹は無尽蔵にある。放置したままでは害になるものを利用することで、化学肥料の使用量を抑えて環境にも貢献できる」と力を込める。

堆肥に使う竹チップは今後、神戸市の外郭団体「神戸農政公社」（同市西区）に集める予定だ。商品を出荷して空になった近畿農産資材のトラックが同公社で竹チップを積み込み、佐用町まで運ぶという。

同公社は放置竹林対策で、市民に電動のこぎりや竹の粉碎機を貸し出している。チクリの販売が拡大するなど竹チップの用途が広がれば、市民が持ち込んだ竹チップを買い取る可能性も出てくる。菊川准教授は「放置竹林の抑制と竹の大量消費につながるシステムができる」と青写真を描く。

西社長は「良い製品なのは間違いないので、後はいかに販路を拡大するか。これからが勝負」と意気込んでいる。問い合わせは近畿農産資材（kinkinousan@kinki-nousan.jp）へ。